１０．黒毛和種繁殖農家で発生した突然死型乳頭糞線虫症を疑う症例

大分家畜保健衛生所
〇岡田彰三・倉原貴美
病鑑 大木万由子・病鑑 平松香菜惠

【はじめに】突然死型乳頭糞線虫症（子牛のポックリ病）は乳頭糞線虫の重度感染によって発症する疾病であり、オガクズ牛舎で密飼いされた生後 2～3 ヶ月齢の子牛に好発。多発時期は 7 月下旬～10 月初旬、発症すると呼吸促迫、奇声等を呈し､数分以内に死亡。剖検時に小腸粘膜の充血、腸間膜リンパ節の腫脹を認めるが、全く病変を認めない症例の報告もある。診断は採取直後の糞便での虫体検出が必要である。

今回、2021 年 9 月に突然死型乳頭糞線虫症の疑いがある症例に遭遇したことから、その概要と検査方法について報告する。

【発生概要】当該農場は黒毛和種 50 頭規模の繁殖農家で、牛床にオガクズを使用。発生時に駆虫は未実施。2021 年 9 月 5 日早朝では異常は無く、昼に畜主が子牛の死亡を確認したため、担当獣医師に報告。死亡子牛は 1 ヶ月齢、前駆症状無しに突然死したことから、翌日に当所で剖検を実施。

【剖検成績】剖検で空腸上部に隣接する腸間膜リンパ節の腫脹を認めたが、その他に特徴的な剖検所見は認められず。病理組織学的検査で空腸内に線虫の虫体と虫卵を認める。この結果から突然死型乳頭糞線虫症を疑い、同居牛に対して追加検査を実施。

【材料及び方法】当該農場の同月齢の子牛計 5 頭から糞便を採取し、砂糖遠心浮遊法で検査を実施。糞便は採取から 6 時間以上経過しており、他の線虫卵との鑑別が必要であるため、砂糖遠心浮遊法の上清と当所で作成したプライマーを用いた PCR 検査、及びポリ袋培養法を用いた糞便培養を実施し、種の同定を行った。

【成績】砂糖遠心浮遊法では、全頭で軽度から中程度（16～6600EPG）の幼虫形成卵を検出。PCR 検査では虫卵数の多い 2 検体が陽性。糞便培養で得られた感染子虫は食道等の形態的特徴から乳頭糞線虫と同定。

死亡子牛には剖検で特徴的な所見が認められず、病理組織学的検査での線虫の検出、同居子牛全頭で乳頭糞線虫の感染が認められたことから、本症例を「突然死型乳頭糞線虫症の疑い」と診断。

【対策】一時的な処置として飼養牛全頭に駆虫を実施した結果､突然死の続発はなかった。乳頭糞線虫はプレパテント・ピリオドが 8～12 日と短く、自由生活世代で増殖するため根絶は難しい。今後は導入牛への駆虫の実施、及び多発時期に子牛への定期的な駆虫と糞便検査を行い、感染量をコントロールし、突然死の予防を行っていく。

【まとめ】従来の糞便検査では採取直後に検査できない場合、3～4 日培養し感染子虫の観察をする必要があり、診断と対策に遅れが生じる。今回、同居牛の検査では糞便検査に加えて PCR 検査を実施し、中程度感染の検体で陽性となったことから、PCR 検査は重度感染で発症する突然死型乳頭糞線虫症の迅速な診断と対策に有用であると考えられる。また、今回の症例を踏まえて、駆虫等の対策が疎かになっている農家に対して改めて注意喚起を行っていきたい。